

1. 教育の責任

「歴史、文化、国際関係、言語など人類の営為が生み出したさまざまな文化的事象を教育研究の対象とし、文化についての深い洞察と豊かな教養を身につけ、異文化に対しても広い視野をもって尊重し理解することのできる教養豊かな人材を養成する」という国際日本学部の教育目標をふまえて、日本と特に関わりの深い中国の歴史を中心としてアジアの歴史的事象を知ることによって、日本という国の歩んできた道を客観的に理解し、同時にまた多様な価値観があることを学び、「世界」と「日本」の両方を視野に入れたグローバルな人材の育成に努める。

「キャリアデザインⅠ」（演習、コアカリキュラム科目、春学期、2単位）

「キャリアデザインⅡ」（演習、コアカリキュラム科目、秋学期、2単位）

「東洋史の扉」（講義、東洋史・西洋史メジャー選択必修科目、春学期、2単位）

「東洋史入門」（演習、東洋史・西洋史メジャー選択科目、春学期、2単位）

「東洋近世近代史講義」（講義、東洋史・西洋史メジャー選択科目、秋学期、2単位）

「東洋史研究」（演習、東洋史・西洋史メジャー選択科目、秋学期、2単位）

「アジア史論」（講義、東洋史・西洋史メジャー選択科目、春学期、2単位）

「東洋史総合講義」（演習、東洋史・西洋史メジャー選択必修科目、秋学期、2単位）

「ゼミナールⅠ」（演習、コアカリキュラム科目、春学期、2単位）

「ゼミナールⅡ」（演習、コアカリキュラム科目、秋学期、2単位）

「卒業研究」（演習、コアカリキュラム科目、通年、4単位）

「東洋史特殊研究Ⅰ」（講義、大学院科目、春学期、2単位）

「東洋史特殊研究Ⅱ」（講義、大学院科目、秋学期、2単位）

「比較文化特別研究（研究指導）」（演習、大学院科目、通年、4単位）

2. 教育の理念

「豊かな教養と専門的学術、旺盛な自己開発精神、優れた国際感覚および問題解決能力を備えた人材を育成する」という本学の教育理念に則り、有為な人材を社会に送り出すことが最も基本的な教育理念である。

また、大学に籍を置く研究者として、自らの研究活動によって得たものを学生たちに伝え、そして自らがその立場上享受しえた事柄を社会に還元するのは当然の責務であると考えます。

具体的には、中国史を専門とする立場から、日本のルーツにかかわる歴史的背景としての「豊かな教養と専門的学術」を、そして自らのルーツを認識することから生まれる「旺盛な自己開発精神」を、さらには日本を含めた東アジアの多元的な歴史的な文脈を理解することにより「優れた国際感覚および問題解決能力」を、それぞれ育成することが教育上の理念である。

3. 教育の方法

上記「教育の理念」に照らして、歴史を教育する際に重視し、実践している主なことは以下の通りである。

まず、「東洋史の扉」や「東洋近世近代史講義」などの概説的な講義では、中国の歴史を見る視点として漢族中心史観ではなく、北方遊牧民や、日本・朝鮮など周辺諸国をも含めてできるだけ客観的な立場から俯瞰する。特に近世以降では東アジアだけでなく地球規模で俯瞰する視点も取り入れている。

次に「アジア史論」ではインド発祥の仏教が中国へ伝わり、さらにそこから周辺地域へ伝播の様子を見ることによって歴史上、実際に起こった「異文化接触」「異文化受容」の具体的ありようについて理解を深める。

このほか重視しているのは、「いま目の前に見えていること（＝現在の姿）」を無条件に当たり前のものとして受け入れるのではなく、その歴史的な由来、過去の姿を知り、そこから現在に至るまでの軌跡を具体的に知ることによって、「現在の姿」が持つ意味やそこに含まれる問題を認識する、ということである。たとえば「東洋史入門」「東洋史研究」では、中国史教育の一環として漢文を読み、漢字文化

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：山口 正晃 作成日：2024年1月28日

に慣れ親しむという趣旨の授業を行っている。そこでは当然、高校までの教育では習っていない漢字・漢語の知識に多く触れることになる。そこで学生に気づいて欲しいのは、高校までの教育内容には国によって「枠」がはめられている、ということである。これまで長い歴史の中で積み重ねられてきた膨大な「漢字世界」の中のごく一部だけを切り取って、小・中・高校で教えられてきた、ということである。以上のような観点の授業を受けることによって、学生にはより客観的で、枠にとらわれず、地球規模で物事を考えることができるようになることを期待している。

4. 教育の成果

C-PLATS の項目としては授業ごとに概ね期待通りの成果が出ている。ただし、「客観的な視点」「異文化理解」「枠にとらわれない発想」という点においては当然のことながら個人差が大きくなるように感じられる。とくにレベルナンバーが下の科目ほど、これも当然のことながら様々な学生が集まるために、それぞれの理解度・習得度には大きな開きがある。逆にいえば、レベルナンバーの高い科目においては、授業の様子や試験・レポートの内容を見ても一定の成果を出せている。

5. 改善への努力と今後の目標

まず取り組むべき改善点は、レベルナンバーが下の、様々な学生（つまり史学を必ずしも志望していない学生も含めて）が集まる科目において、内容がやや難解な嫌いがあるということである。そうした学生にとっては単なる「小難しい授業」で終わってしまい、上記「教育の理念」も「目標」も伝わらずに終わってしまうことが多いように感じる。そこで他学部・他専攻の学生により焦点を当て、入口のハードルを下げる必要がある。差し当たって予定しているのは、レベルナンバー100番の「東洋史の扉」において、たとえば「世界遺産」などより親しみの持てるトピックからアプローチする方法である。これにより、史学専攻を志望していない学生にも一定の理解のしやすさを提供できることが期待されるが、実際にはその効果については数年単位で検証する必要があるだろう。

【添付資料】

1. 「アジア史論」シラバス
2. 「東洋史研究」シラバス
3. 2022年度「アジア史論」授業アンケート
4. 2022年度「東洋史研究」授業アンケート